

教の眞實性に就いて

大 須 賀 秀 道

一

宗教といへば、いづれの宗教にも特定の經典がありまた其教義がある。而もその經典や教義には、必ず自らその眞實性が強調せられてゐる。

已に人類に對する救済が宗教の目的であるとすれば、その救済が眞實であり窮極であるといふことが、即ちその宗教の宗教たる本質でなくてはならない。世界に宗教の數は多いけれど、苟且にも虚偽で救はれるといふことのない限り、必ず自救の眞實性が認められ、それが信仰の基本を成してゐるに相違ない。且らく之を佛教の上に考ふるも、同じ佛教に諸宗諸派が存立し幾多傳統の分れてゐるといふのも、それは單に經典や論釋を異にしてゐるからではなくて、それ／＼教の眞實性といふものに對する見解を異にしてゐるからであるというてよい。

それは恐らく既に經典その物の内容が、何等か自救の眞實とする所のものを開顯し讃揚してゐるのである。隨つて之を釋明せんとした論とか釋とかいふものが、その眞實性を闡明せんと努めてゐることは言ふまでもない。されば支那日本佛教史上に展開せる佛教諸宗といふも、恐らく自家の教の眞實性の上に、優越な救済の實現を主張せんとしたものであつて、こゝに所謂教相判釋といへる教の眞實性に對する批判といふことが、立教開宗の要義とせられるに至つたのである。

だから教の眞實性といふことを離れては、佛教の教學も理解し得られない。諸宗に於ける教相判釋、例せば天台の五時八教、華嚴の五教十宗、眞言の二教十住心といふが如き、孰れもこの眞實に對する統合的批判に外ならぬのであつて、教の眞實性の批判せられるところに、佛教教

學の特質があり、またその生命があると看做してよい。

二

然らば諸宗に於て如何に教の權實眞假が批判せられてゐるかといふに、其批判の方式は様々に異つてゐるけれど、その規準に三の面がある。即ち一には其經の教主即ち能説の佛身位格から批判するもので、其經を説ける教主佛身の勝劣を以て、所説教義の淺深を判定せんとする方式である。例せば華嚴經の教主は菩提樹下成道の釋迦佛でありつゝ、而も十身具足の毘盧遮那佛なりと見るが如き、又天台宗で法華經の教主を丈六應身の釋迦に即して不須現の尊特報身なりと釋する如き、其他眞言宗で法身説法の義を立て、眞實語言を自證せんとするもの、日蓮が壽量品の本門開顯に立ちて、本有無作の三身を力説せるもの、孰れもこれ釋迦は單なる釋迦にあらず、其背後に本佛の存在を認めて、釋尊の説ける語の内容は釋尊其人の佛としての位格が高められることにより、一層優越の眞實性を有つものと考へられたのであつた。

これ各宗いづれも独自の佛教觀と共に、特異の佛陀觀を有つ所以であつて、教義は單なる空疎な理論ではなく

して、それが既に佛身佛體として具體的に顯現せられてゐる。故に諸經典は同じく釋迦が説かれた經典であり、その釋迦は印度に出現せる同一の釋迦であつたとしても、諸經典それ〴〵に之を説かれた釋迦の悟境内容を異にするものであると同時に、之を説かれた釋迦佛身の位格を異にし、其佛身位格の特質によつて、所説の教法に亦權實眞假が批判せられ、眞實の程度を異にすると考へられた。

だから教の眞實性が、之を説ける教主の佛陀としての位格から價値づけられる。近くは天台宗で教に藏通別圓の四教を分つが、それ〴〵能説の教主が異うてゐる。即ち藏教を説ける佛は劣應身、通教の佛は帶劣勝應身、別教の佛は須現尊特身、圓教の佛は不須現尊特身であるといふやうに、佛身の勝劣から教主の優劣が段階づけられる。かくて經典に説かれた内容に、大小漸頓の相違あるのは、それは已に之を説ける教主釋尊の佛陀としての位格に高下の段階があるからである。而してこの教主の位格こそ、所説の教の眞實性を規定するものであつて、一代諸經に説かれてゐる佛陀世尊のさま〴〵の様相は、この

衆生の機感に應ずる教主としての位格を表現し、それぞれ何等か教の内容を價值づけてゐるものと考へられたのであつた。

三

本來教といふ語の意義は、法華玄義に「教とは聖人、下に被らしむるの言也」と釋せる如く、何れの宗教でも其開祖を眞實に聖なる人として、その遺せる語に指導力啓示力を感じるところに教權を認める。だから其聖といふことの内容が、或は人間として、或は天仙として、或は神として、或は菩薩又は佛として意味づけられることにより、様々に宗教の性格が差別せられてゐるものと考へてよい。殊に佛教にあつて同じ大聖佛陀としても、單に現實の應身を見るもあり、法身佛を見るもあり、法報應三身各別して考ふる見方もあれば、三身互融して三身即一身と立つる見解もあつて、能説の佛の位格を異にすると同時に、教の眞實といふものゝ批判を異にすることゝなつてゐる。だから經は單なる歴史的過去の聖者の遺せる語ではない。それが教として宗教的救済を約束する威力を有つといふことは、必ずや現に生ける佛陀の人格

と悲願力とを背景とするのであつて、諸經の流通分に出てゐる滅後に對する勸持流通といふことにも、何等かそこに教の傳統的な實踐の支持せられる偉大な力といふものが豫想せられてゐる。

斯く教の眞實は、能説の佛陀によつて性格づけられるのであるが、また第二に其眞實性を内容づけるものが、所説の教義であることは言ふまでもない。即ち一經に説き詮された教法とか教理とかいふものは、直に教の眞實性を規定する。十住毘婆娑論に「教とは他を教ふるに善法を以てするに名づく」とあるのも、四教義に「教は詮理化物を以て義となす」と解したのも、何等か如來の大法即ち善法とか眞理とかいふものが言語で詮表せられてゐるのを教と名づけてゐる。だからその大法が善法を指教するものであり、眞理を詮表せるものであつてこそ、そこに教としての價值が認められるのである。

然るに完全な救済は、窮極の眞理にのみ實現せられる。故にその教の救済が眞實であるといふことは、それが窮極の眞理を詮はすものでなくてはならない。これは諸宗の競つて自己の教が最上窮極の眞理なることを主張する

所以であつて、華嚴宗が五教十宗を立て、同別一乘を判じ無盡の縁起を説くが如き、又天台宗が五時八教を立て、權實麤妙を判じ純圓獨妙を誇るが如き、いづれも所詮の教理から能詮の教の眞實性を顯はさんとしてゐるのである。

四

斯の如く教の眞實性は、能説教主の佛身から批判せられるものと、所説教義の内容から批判せられるものとがあれど、更に第三に教益即ち實踐の成果から批判せられてゐることが看過し得られない。

已に宗教として人類の救済を目的とする限り、如何に教主の品格が勝れてゐても、又所説の教法が高遠な理想であつても、人々の實踐に其効果が發揮せられず、その救済が體驗として實證せられるものでなくては、其教に眞實性が圓具せるものとは看做されない。これは既に一乗とか悉有佛性とか頓教とかいふやうな思想に現はれてゐるが、彼の禪宗の教外別傳不立文字の主張の如き、専らこの直爾見性の立場から文字言句を超越して、教の眞實性を直接に機の自證の上に見出さうとしたのである。

されば教を詮理化物と釋するけれど、詮理は全く化物の爲であつて、化物の力を缺ける詮理は、それが如何に高遠の眞理であつても、完全な教の資格を缺いてゐる。故に所説の教の眞實性が、教主の位格によつて規定せられるといふのも、それは實際に於いて寧ろ所化の衆生から規定せられてゐるのである。即ち教は佛陀と衆生との中間に醸成せられたものであつて、その佛陀といふも、衆生の機感を離れては、存在を認め得ない。随つて佛身の位格既に衆生の機感によつて段階づけられるものであれば、所説の教法も亦聽衆の品位によつて、權實眞假の差別せらるべきは勿論である。これ即ち「如來一音演說法衆生隨類各得解」といふが如き考へ方の現はれた所以であつて、教の眞實性の規定せられる根據は、能説の教主にありと言はんよりも、また所説の教法にありと言はんよりも、寧ろ衆生の機感と體驗とにありと見られ得ることとなる。

五

由來、教の眞實性とは、宗教の本質に関する検討である。然らば宗教の本質とは果して何であらうか、それが

殿堂や儀禮や經典でないことは勿論だが、神體や教義や
 は亦必ずしも眞の本質ではない、まこと宗教の宗教たる
 所以は、人々の信仰に體驗せられ實踐せられる邊にあり
 と見られなくてはならないから、教の眞實性といふこと
 も、亦自ら機の體驗に重點がおかれることとなる。

されど人間の性能は千差萬別して、面貌の等しからぬ
 やうに機相も亦一樣でない。だから人々に體驗せられ實
 踐せられては、謂ゆる諸機各別して相對化せられるから、
 唯一絶對の眞實たり得ない。既に機にあつて平等絶對で
 ないとすれば、其機に拘束せられて教も絶對ならず、佛
 も亦平等でない、その因已に同一でなければ、果も亦同
 一でないから、因果ともに相對に墮して、それが窮極の
 眞實とはなり得ない。

だから日本に興隆せる大乘佛教は、孰れも一乘を標榜
 し、因一果一の平等の理想に邁進した。華嚴にせよ天台
 にせよ、或は因心本具に立ち或は果海融通によつて、一
 切皆成佛の圓頓の妙旨を打ち建てたけれど、憾むらくは
 實踐の成果の寥々たるを免れなかつた。眞言の即身成佛、
 禪の見性頓悟、亦それが如説の修行に惱みを感じた。だ

から教の眞實性といふことが、いかに機の實踐に證明せ
 られ、而もそれが一般化せられて、事實として機教とも
 に平等絶對たり得るかといふことは、自他救済の上に解
 決の要求せられる中核の問題であつた。

この空虚を充たさうとする時代の要求から、新たに淨
 土教の聖淨二門の時機の批判が現はれ、又日蓮の教機時
 國等の思想が出でて強く民衆の心を牽きつけた。かくて
 佛教は山上から街頭へと進出し、融通念佛とか時宗とか
 いふやうに、汎く一般民衆の救済へと喚びかけられるこ
 ととはなつた。當時親鸞の淨土眞宗もまた此の氣運を負
 つて起つたものであることは言ふまでもない。故に『教
 行信證』の開顯せるところ、たゞ眞實の二字にあつたの
 であるが、その眞實とは廣く「群萌を拯ひ、恵むに眞實
 之利を以てせん」とする普遍妥當の眞實であつた。教と
 いひ行といひ信といひ、また證といひ、それが眞實であ
 るといふことは、言ふまでもなく彌陀願力の廻向によるか
 らであつて、十方衆生と誓はれた本願に眞實の根據をお
 いてゐるところに、親鸞教の特質があると言つてよい。

六

されど教行信證にあつても、教の眞實を立證するには、大無量壽經に依つて、教主釋尊の位格から判定し、大寂定中に於ける五徳瑞現の光顔巍巍の相や佛々相念の境を以てし、これが本願眞實の開説を出世本懷とするところに、その眞實性を認めてゐる。これ釋尊は單なる釋迦佛にあらず、本佛彌陀の顯現として、二尊一致の悲懷を説き顯はすところに、教主として釋尊の位格が判定せられ、自ら教の眞實性が明證せられてゐる。

されど其眞實性が所説の内容によつて規定せられることは勿論である。故に「以^テ是^ヲ説^キ如來本願^ヲ爲^ス經^ニ宗致^ニ」とあつて、教の眞實なることは、斯經所説の本願が眞實なるに依るからである。だから「如來興世の本意には本願眞實ひらきてぞ」と、釋尊が此土に於ける教主釋尊たり得たのは、たゞ彌陀の本願海を開顯せられたからであつた。若しも釋尊が大無量壽經を説がなかつたらば、五濁惡時の群生海は、彌陀本願の救ひに洩れて、恐らく釋尊とも御縁が結ばれずに果てたであらう。故に教行信證では、釋尊の説かれた教といふものが、彌陀往相廻向の内容とせられ、二尊一致の建前から、彌陀教の外に釋

迦教を見ないところに、教の絶對眞實といふことが認められることとなる。

隨つて機に現れる教益は飽くまで重視せられ、教の權實には必ず機の利鈍といふことが、いつも聖道に對して判教の規準となる。故に教の眞實といふことには、必ず機に於ける救済の全現といふことが條件とせられ、如何な極惡底下の機にも、極善最上の救ひが實現せられてこそ、一乘究竟の極説と見られるのである。これ即ち行卷に一乘海の釋があつて、本願一乘は絶對不二の教であると同時に、絶對不二の機であることを絶讃し、愚禿鈔には一乘圓滿之機と名づけた所以である。また信卷に於いて、教には横超斷の義を明して、「横超者即願成就一實圓滿之眞教眞宗是也」と斷じ、機には眞佛弟子の義を讀へて「眞言對^レ偽對^レ假也」云々と、此にも内外諸教に對する批判の基地を機教の二に置かれたのであつた。

斯の如く眞宗に於ける教の眞宗性は、「淨土眞宗證道今盛^{ナリ}」といふ教益の實現に批判根據をおき、又「大小聖人重輕惡人皆同齊應^レ歸^レ選擇^ニ大寶海^ニ念佛成佛^ト」といふ一切皆成佛の普遍救済を趣旨として、そこに教主釋尊の出

世の本懷を認めてゐるのである。これが即ち本願力に住持せられつゝある相であつて、之を疊疊は不虛作住持の徳として、願と力との相成するを成就といふとの釋を與へてゐる。不虛作とは即ち眞實であつて、凡ゆる轉變虛假のその中に、佛力住持の救済のみが唯一の絶對眞實なのである。

七

以上、教主と教理と教益との三を規準として、教の眞實性といふことを見やうとした。佛教に於ける經典は孰れも此の三つの要素から、それが千態萬様の表現を成してゐる。

いつも歸敬の對象とせられる佛法僧の三寶といふのも、また此の三つに外ならない。即ち佛とは教主であり、法は教理教法であり、僧は實踐に於ける教益の現れである。既に經典の構造といふものが、本來この三つから成立してゐるのであるから、宗教として經典の奉持頂戴せられた姿といへば、歸敬三寶といふことの外にあらう筈はない。だからこれら歸敬三寶の内容をその儘に表現せられてゐるのが、即ち成立せる經典であるとも考へ得ら

れる。そして三寶の寶とは、貴ぶべき價值批判の意味であるとするれば、佛法僧の三に對し、その眞實の批判せられるところに、何人にも自己の篤敬すべき三寶といふものが見出されることとなる。

然るに此三寶本より同體にして相離れたものでない。佛法僧いづれでも其中の一寶が成立すれば、他の二寶は必ず同時に成立する。だから眞實教の成立といふは、三寶の眞實に建設せられた所にあるのであつて、經典に次いで論釋の開顯せるところも、また眞實三寶の建立に外ならない。故に論釋の卷頭には概ね三寶に對する歸敬の偈頌が掲げられてゐる。あの歸敬頌に現された三寶の性格は、必ず其書に表現された思想信仰の要約せられた一部の標幟であつて、即ち造論釋義によつて建立せられた眞實寶たるべき三寶である。近く大乘起信論でいへば、あの歸敬頌にあつて、「最勝業、遍知色無礙自在救世大悲者」は佛寶にして報化二身を出せるもの、これ眞如の用大である。次に「及彼身體相法性眞如海無量功德藏」とあるは、法寶にして眞如の體相二大である。三身の中ではこれ法身である。又次の「如實修行等」とあるは即ち僧寶

である。かく馬鳴大士の歸敬せる三寶は、起信論の一心二門三大四信五行といふ如き後の本文に現された立義解釋の内容を表示せるものであつて、一部の目標は要するに自己の歸敬する三寶の教義的實踐的の建立にあるといふてよい。

かうした意味に於いて、教の眞實性といふものが、佛法僧の三面から規定せられることとなり、そこに宗教としての教權が認められてゐる。彼の淨土論に於ける我依修多羅等の一偈の如きも、疊贅の論註に之を釋して、これは優婆提舍の名を成ずる爲の語であると見られてゐる。菩薩が經を釋して、正しき優婆提舍としての資格を有つことは、即ち論の眞實性の認定である。されば註には此の我依等の語について、「何所依・何故依・云何依」の三句を開いてゐるが、それに答へて「何所依者依修多羅」と解せるは、教主釋尊の説かれた修多羅なるが故にと答へたのである。次に「何故依者以如來即眞實功德相」故一とあるは、所説の教法たる彌陀如來の眞實功德即ち本願名號を以て答へたのである。又次の「云何依者修五念門・相應故」とは機の實踐に於ける教益からの答であ

る。だからこれは佛法僧の三面から、優婆提舍の名を認め其眞實性を證明せるものと見てよい。之を成上起下の語であるといふのも、上の一偈を三念門に配すれば、上三句に世尊と呼び歸命といふは禮拜にしてこれは教主の佛に約す。盡十無碍光如來は讚嘆門なりといふ、讚嘆せられるは如來の眞實功德に外ならざれば、これ即ち教法である。願生安樂國は作願門なりといふ、これ生安樂といふ教益に對する實踐に外ならず、されば此一偈がやはり佛法僧の三に配當せられることによつて、下の觀察廻向二門の偈に對し、我依修多羅の一偈がその中間にありて成上起下の態勢を成せることが理解せられるのである。

而も教の眞實性は、宗教として特に如實修行の上に體現せられる。それはこゝに如實に五念門を修することが、云何依の間に對へて依修多羅の方法とせられてゐるばかりか、讚嘆門の下には讚嘆の讚嘆たり得ることは、偏に如實修行相應にありと示されてゐる。本より佛徳の稱揚讚嘆を離れて、眞實教はないのであるから、如實の行の存するところのみに、教の眞實性は體現せられるのである。だから釋尊の教法も之を第十七諸佛稱名の願からい

へば、諸佛の中の一佛として、彌陀名の稱揚讃嘆に外ならず、信卷末卷に「故知一心是名如實修行相應、即是正教是正義」云云と釋せるが如く、眞宗に於ける正教正義たる眞實教は、たゞ釋迦の言説にのみ宿るのではなく、廣く一般の如實修行相應者の言説に通ずる。されば宗祖や列祖と仰がれてゐる傳統の知識は勿論のこと、いかな凡愚でも如實修行相應の人々の語には、そこに讃嘆の行を成じて、本願の上から眞實性の價值を有つのである。

八

之を要するに、佛法僧の三者、三にして三にあらず、互に交流し制約するところに、宗教的救済の内容がある。即ち教主の性格の規定せられる悟境は、其儘に教法として流現せられ、其教法こそ教主をして教主たらしめた悟境の本質であつて、教法を離れて教主の存在はあり得ない。而して其佛といふも法といふも、偏に僧の如實行にのみ體現せられるとすれば、佛身の應現が機感に制約せられ、教法の啓示が體驗に支持せられるのであつて、行者は全く佛に調御せられ、法に育成せられつゝあると同時に、却つて行者自らが佛と法とを拘束して、謂はゆる

大念には大佛を見、小念には小佛を見るばかりか、その念の大小までがいつか自己によつて規定せられたのである。

故に教の眞實性といふことは、かゝる全體の動きにのみ把握せらるべきである。即ち佛法僧の三が渾然として圓融流動するところに、救済の實相があるのであつて、佛教の諸經典がその内容とする構造を觀すれば、全く此三者の互に感應交流せる曼陀羅的表現に外ならないのである。但し教の眞實といへば、おのづから三者の中教法にのみ重點を置き、或は招喚の教命、或は如來の仰せといふ如き、超越的の啓示に絶對的な指導力と實在性を認めるといふことも、實際上信仰の體驗として切實な意味が感ぜられるに相違ない。されどそれは三者全體としての具體的な動きの上にあつてのみ眞實性を有つのであつて、全體から切り離して抽象的にさうしたものに生命のあらう筈はない。

而して斯うした宗教の具體的な内容の上にあつて、その最高の價值が果して孰れにありと見るべきであらうか。實際に救済として最も高く最も廣くといふ理想の下

に、その最高價值實現の急成速達といふことが、日本佛教史の發展の上に唯一の目標とせられてゐた。これ即ち即身成佛即身是佛の飛躍的頓速解脫の主唱せられた所以であつて、眞宗に於ける「本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提無二と、すみやかにとくさとらし

む」とあるのも、極度に此の眞實性を發揮せんとする指導の頂巔に立てるものであつた。そしてこの動きの全體が總持せられる支點として、本願力廻向の南無阿彌陀佛が絶対眞實者たり得るのである。(昭和一七、三、一五)